

放課後の子ども達の体験を支える高齢者

<ポイント>

- ・子ども達に様々な体験を提供する事業の中で、高齢者が「先生役」を担っている。
- ・高齢者は、子ども達によりよい体験をしてもらうために、日々の暮らしの折々に体験の方法の工夫を考え、素材を集めるなど、「先生役」におおきなやりがい、生きがいを感じている。

<高齢者がかかわる事業の概要>

愛知県名古屋市北区如意小学校の空きスペースに設置されたトワイライトスクールには、ウィークデイの放課後に、帰宅前の子ども達が集まる。子ども達は、自由に創作活動やゲーム、スポーツなどを楽しんだり、用意されたプログラムに参加して様々な体験を行っている。

トワイライトスクールは、同市教育委員会が、地域の活性化と生涯学習の振興、そして、子ども達の健全育成を目指し、平成11年より実施した事業である。現在ほとんどの小学校区で実施されているトワイライトスクールには、それぞれに専門員がおかれ、彼らを中心としたボランティアに支えられながら在校生を対象とした独自の事業展開がなされている。

如意小学校区のトワイライトスクールは、専門員1名と、彼を助け子ども達の遊び相手や運営の補助を行う児童の父母を中心としたボランティア（アシスタントパートナー）13名、そして、用意された体験プログラムの「先生役」を担う地域の有志からなるボランティア講師12名によって運営されている。平日は授業終了時から午後6時まで、第2、第4土曜日や長期休業期間に開催されているどう同スクールには、如意小学校の児童360名あまりのうち、200名をこえる児童が登録している。

同スクールの専門員は、同スクールの最大の特徴は体験プログラムにあるという。それは、廃物を利用したモノづくりのプログラムと、農地が残る地域性を活かした農業、生活文化体験のプログラムだ。

こうした体験プログラムが実施されない日には、子ども達は自由に遊んでいるのだが、プログラムの開設日には、事前に予約を取らなければならないほど多くの子どもがプログラムに参加する。そして、こうしたプログラムを支えるボランティア



講師として高齢者が活躍している。

< 高齢者が担う役割 >

同スクールの中で、高齢者が担う役割は大きい。まず、運営を中心となって担う専門員は、退職教員に委嘱される。また、同スクールの運営組織として、地域の様々な団体が名を連ねる実行委員会がある。会議が開催される頻度は低いものの、農作業等の体験プログラムの実施などを下支えしている同委員会のメンバーの中にも高齢者は少なくない。

何よりも、注目すべきは、先述したボランティア講師として活躍する高齢者だ。彼らは、毎月集まり翌月に誰がいつ何を実施するのかを決めている。ボランティア講師は、この予定に従って、子ども達にとって魅力のあるメニューを考え、それを子ども達がどのように楽しめるのか、プログラムの展開から指導、援助の仕方に至るまでプログラムの企画を構想し、準備を行う。そして、当日には、先生役として、10数名から時には50名近い子ども達に指導、援助を行う。

< 獲得される生きがい >

ここでは、ボランティア講師のまとめ役を担う高齢者と彼らの取り組みを良く知る専門員の声を通して、どのように生きがい獲得されているのかに触れてみたい。

手芸や民謡のボランティア講師として活躍する安藤銘子さんは、すべてが同スクールにつながっている、「犬の散歩に行っても、そんな感じで何かを探したりしている」と笑いながら教えてくれた。安藤さんをはじめ、ボランティア講師は、自分の趣味や特技のそのまま子ども達に指導しているわけではない、と。

専門員の野々目さんは、最初は子どもに教えるということでボランティア講師もとまどっていたと振り返る。そして、今では「1年生から6年生まで、学年にあわせて作り方、作る部分を工夫してくるから、ボランティア講師が「工夫してくれるから、子ども達も喜んで作って、家に持ち帰ったりする」と、ボランティア講師の熱心さが



同スクールの活性化を支えていると指摘する。

家でいろんな本を読んで「勉強」する。自分で考えて、おもしろいからこれは子どもに、となる。事前に子ども達が作れるようにと、方法を考え実際に作ってみて、「子ども達に見本を見せる」。こんなことは、自分だけでなく、ボランティア講師の多くがやっていることだ、と安藤さんはさらりと言っている。何も努力してそうしているわけではない、「うれしいから自然にそうなる」ということだ。野々目さんは、こうしたボランティア講師のおかげで、不要品や自然物での作品づくりが、如意小のトワイライトの大きな特徴になってきた、と語る。

自分の気持ちも一緒だったが、と安藤さんがひとつのエピソードを教えてくれた。予算が削減されたことがあった。その時ボランティア講師仲間から「そんなことは関係ない、私たちは子どもと一緒にいるのが楽しい、今まで通りやらせてほしい」と言われた、と。

安藤さんは、仲間の気持ちをこう代弁する。「ボランティアに来ると、お金では代えられない喜びが得られる」と。自ら工夫したものづくりに喜んで取り組み、作品を家に持ち帰る子ども達の笑顔。まちで出会うと「先生」といって駆け寄ってきてくれる子どもの笑顔。お陰様で子どもが明るくなりました、と挨拶してくれる若い母親の言葉。安藤さんの「お金では代えられない喜び」とは、このあたりにあるようだ。

< 生きがいの獲得を支える仕組み >

最後に、ボランティア講師（高齢者）達が、上記したような生きがいを獲得することを支えている仕組みについて、キーマンの取り組みを通してまとめてみたい。

- ・ボランティア講師に、プログラムの企画から運営、指導までを任せ、専門員（キーマン）等は必要とされる材料の手配など黒子に徹することで、ボランティア講師の主体性を引き出していた（そのことを通して生きがい獲得を後押ししていた）。
- ・ボランティア講師の指導を受けてつくられた作品や指導のスナップ写真が、専門員の手で同スクールの様々なスペースに飾られるなど、自らの取り組みの成果が子ども達に喜ばれていることをボランティア講師が実感できるようになっていた。
- ・専門員の手で毎月発行される広報紙で地域にボランティア講師の活躍を伝えたり、そこに子ども達の感想を掲載し、ボランティア講師が自らの取り組みの意義を再確認できるようになっていた。